

マインドマップによるノートテイキングの試み —「日本事情」クラスにおけるドキュメンタリー映像視聴の記録として—

Using Mind Mapping Skills for Note-taking: Through the Note-taking Activities of Documentary Movies in ‘Current Issue in Japan’.

飯島 有美子*
Yumiko IJIMA

抄録

本稿では、学部留学生対象の日本語クラス「日本事情」において、学生のドキュドラマ制作活動への導入としてドキュメンタリー映像を視聴させ、その視聴の記録のツールとしてマインドマップの利用を試みた。マインドマップの利用の効果を分析した結果、マインドマップの持つ機能である「情報の記録と整理」が有効に働いているに加え、映像から得られるイメージや感情の記録と整理についても、文章で記録する場合より容易であることが認められた。

Abstract

In the class of ‘Current Issues in Japan’ for undergraduate international students, mind mapping skills were introduced to keep records of documentary movies which were used to help those students to understand the backgrounds of the issues. Mind mapping style as a form of note-taking made it easier for the students to record and organize their impressions and feelings they had when they watched the movies compared to taking notes in sentences.

1. はじめに

本稿は学部留学生対象の日本語クラス「日本事情」におけるマインドマップを採用した実践を報告するものである。この「日本事情」の授業では学生のドキュドラマ制作活動への導入としてドキュメンタリー映像の視聴をさせ、その視聴の記録のためにマインドマップを採用した。マインドマップというのは、1970年代初頭イギリス人のトニー・ブサンによって開発された「情報の記録と整理、順位付けをする」(トニー・ブサン2008) 思考のためのツールである。詳しい説明とその利用目的については次章にて行う。

まず、今回の実践にいたる背景を説明する。筆者は2007年から学部留学生対象の日本語クラス「日本事情」において、学習者の多文化理解の促進が可能で、かつ語学スキルのみならず、アカデ

* 関西国際大学人間科学部

ミックスキルの多面的向上が期待できる「ドキュドラマ」という手法を用いた実践に取り組んできた。ドキュドラマとは、事実や史実に基づいて作られたドラマであり、放送や映像の領域で使用される造語である。教育の現場で用いられるドキュドラマとは、アメリカのインディアナ大学で学部生に対するライティングやスピーチ教育を効果的に行うため、トリマーとハミルトン（2004）によって開発されたもので、ロールプレイや問題解決シナリオ作成と共通する実践でもあり、学生があるテーマに沿って劇を作り上げる過程で、学生の経験的な学習や参加型学習が促される教育ツールである。

日本語教育では、飯島（2010）が日本事情クラスへ日本の社会問題をテーマにしたドキュドラマ制作の導入を試み、学生にドキュドラマを制作させる際「3つの異なる立場（加害者の・被害者の・間に入る専門家的立場）を登場させる」というシナリオの設定条件を加えたことで、学生はドラマ中の事件を多面的に捉えられ、何らかの意志決定を下す必要を余儀なくされ、学生の多文化理解の促進がされたと報告している。しかし、学生の多文化理解の促進とアカデミックスキルの向上は実現できたものの、問題も生じた。それはドキュドラマ制作過程の冒頭において、学生がテーマとする社会問題についての知識が乏しく、文献等の文字による情報ではイメージを持つことが難しく情報収集に時間がかかりすぎるため、ドキュドラマ制作自体の時間をくってしまうことである。そこで、テーマとなる社会問題についての情報収集を容易にするため、今回の実践ではドキュドラマ制作前にドキュメンタリー映像を学生に見せ、情報収集をさせるという授業設計にした。しかし、映像を記録するための手段を何にするかという新たな問題が生じた。これまでの実践では情報は文字情報から収集させていたので、学生は文献をコピーしたり、ノートに書き写したりして記録していた。一方、映像視聴による情報収集では、多量な情報が視覚・聴覚を通して流れ込んでくるうえ、映像を言語化せねばノートが取れないので、十分に記録を残せない恐れがある。そこで、文字によるノートテイキングではなく、イメージを記録する「マインドマップ」を用いて記録させることにした。

2. マインドマップとその利用の目的

マインドマップとは、1970年代初頭イギリス人のトニー・ブサンによって開発された「情報の記録と整理、順位付けをする」（トニー・ブサン2008）思考のためのツールである。関連図書が100か国以上で翻訳されており、教育やビジネスの世界で広く利用されている。マインドマップは脳の放射思考を利用したもので、中心に表現したいテーマを置き、そこから連想するキーワードを放射状につなげ広げていくことで発想を発散的に伸ばしていくものである。下に示す図1はマインドマップの例「行事の計画：お花見」（トニー・ブサン2008）である。このように中心にテーマになるセントラル・イメージを置き、そこから連想するキーワードを放射状に広げていく。セントラル・イメージから直接伸びた曲線（ブランチ）に記入されたキーワードやイメージを BOI (Basic ordering Ideas) と呼び、考えを整理したり、カテゴリに分けたりするための「言葉」とし、ブランチの先のサブ・ブランチで展開される思考を包括している。図1では「連絡」「おべんとう」「その他」「飲み物」「備品」の5つがBOIに当たる。このように、マインドマップはテーマについて脳に浮かんだイメージを記録していく方法である。

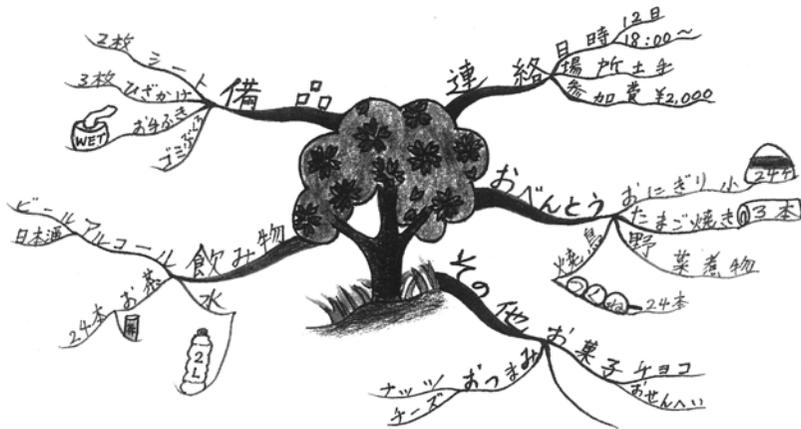


図1 「行事の計画：お花見」についてのマインドマップ例
(トニー・ブサン2008)

語学教育にマインドマップを利用した先行研究には、留学生に日本語作文を書かせる構想段階でマインドマップを用い、内容の吟味と構成を考えさせる上での有効性を報告した和田（2010）があるが、映像視聴のノートテイキングとしてマインドマップを利用したものはない。イメージの記録を特徴とするマインドマップは、映像視聴から得られたイメージを記録する方法として利用できるのではないだろうか。

本稿では、映像視聴のノートテイキングとしてマインドマップを利用し、その効果を検証することを目的とする。

3. 実践の概要

本実践は、学部留学生対象の日本語科目「日本事情Ⅰ」の前半で行ったものである。以下に実践の概要を示す。

期 間：2011年春学期

科 目：学部留学生対象の日本語選択科目「日本事情Ⅰ」

対象者：関西国際大学留学生 16名（3年生8名，4年生8名）

国 籍：全員中国

日本語レベル：上級

内 容：ドキュドラマ制作過程において、その前段階の情報収集をドキュメンタリー映像の視聴によって行わせた。映像視聴のノートテイキングはマインドマップを用いて行わせた。

分析方法：①マインドマップ利用に関するアンケート分析

②学生が書いたマインドマップの分析

次に授業全体について説明しておく。本授業は日本語力とアカデミックスキルの向上，日本社会や仲間の多様性理解の促進を目標としており，その教育手段としてグループによるドキュドラマ制作・発表課題を課している。本授業で取り扱うテーマは「障害者」とした。その理由は社会の多様性を考えるためにその社会のマイノリティを扱うのは，多文化教育の手法としてよく使わ

れることであり、本授業でも応用できると考えたからである。

第1講目にガイダンスと過去の受講者が制作したドキュド라마のビデオ視聴を行った。第2講目から第6講目までは映像の視聴とマインドマップの利用による情報収集等のドキュド라마制作の準備をさせた。第7講目から第13講目まではドキュド라마の登場人物や設定の選定、シナリオ執筆、練習をさせながら、学内発表会のためのリーフレットやポスターの作成をさせた。第14講

表1 映像視聴とマインドマップ利用の授業の流れ

授業回	活動テーマ	活動内容	教材・備品	所要時間(分)
2	マインドマップとは何か	マインドマップについて事例を見せながら、説明する。	『マインドマップ超入門』 『勉強が楽しくなるノート術：マインドマップfor kids』	10
	マインドマップに慣れる	身近なテーマ「私の留学生活」でマインドマップを書く練習をさせ、出来上がったら周りの学生と見せ合わせる。	A3紙、サインペン(8色程度のセット)	40
	マインドマップの利点を知る	マインドマップを使った感想を述べ合わせ、その後発表。		15
3	「障害者」についての知識やイメージの確認	障害者について何も情報のインプットがない状態で、障害者についてのマインドマップを書かせ、自分の持っている知識やイメージを確認させる。	A3紙、サインペン(8色程度のセット)	40
	クラスメートの思考の多様性を知る	マインドマップが出来あがったら、周りの学生と見せ合わせ、情報を共有させる。		10
		気付いたことを発表させる。		10
4	「障害者」についての情報収集	障害者に関するドキュメンタリー映像の視聴させる。	『DVD仲間と生かす個性：車椅子バスケットを通じて』 高校時代、交通事故で下半身に障害を持ち車椅子の使用を余儀なくされた男性が、車椅子バスケットチームに入り活躍している記録。	15
	マインドマップを使って情報整理	障害者をテーマにマインドマップを書かせる。(マインドマップに書くことは、ドキュメンタリーの内容に限らず、自分の頭の中に浮かんだことを自由に書くように教示した)	A3紙、サインペン(8色程度のセット)	30
	クラスメートの思考の多様性を知る	マインドマップが出来あがったら、周りの学生と見せ合わせ、情報を共有させる。 気付いたことを発表させる。		10 10
5	「障害者」についての情報収集	障害者に関するドキュメンタリー映像の視聴させる。	『DVD手と心の通う場所：わくわくわーく作業所を追う』 盲聾者対象の作業所で作業をする障害者とそれを支援するボランティアの様子を記録。	15
	マインドマップを使って情報整理	障害者をテーマにマインドマップを書かせる。(マインドマップに書くことは、ドキュメンタリーの内容に限らず、自分の頭の中に浮かんだことを自由に書くように教示した)	A3紙、サインペン(8色程度のセット)	30
	クラスメートの思考の多様性を知る	マインドマップが出来あがったら、周りの学生と見せ合わせ、情報を共有させる。 気付いたことを発表させる。		10 10
6	「障害者」についての情報収集	障害者に関するドキュメンタリー映像の視聴させる。	『DVDパンから生まれた出会い：障害者自立支援からの学び』 知的障害者対象の作業所でパンを製造し、その企画販売を大学生が支援するプロジェクトを記録したもの。	15
	マインドマップを使って情報整理	障害者をテーマにマインドマップを書かせる。(マインドマップに書くことは、ドキュメンタリーの内容に限らず、自分の頭の中に浮かんだことを自由に書くように教示した)	A3紙、サインペン(8色程度のセット)	30
	クラスメートの思考の多様性を知る	マインドマップが出来あがったら、周りの学生と見せ合わせ、情報を共有させる。 気付いたことを発表させる。		10 10

目にクラス外から観客を招いて成果発表会を行ったのち、その次の最終回に振り返りをさせ、自らの学びに関するレポートを作成させた。

今回研究の対象としたのは、第2講目から6講目までの映像の視聴とマインドマップの利用の回で、本授業の前半部分である。実際の授業の流れを上表1に示した。まず第2講目にマインドマップの説明を行い、身近なテーマ「私の留学生活」でマインドマップの練習をさせた。出来上がったら、周りの学生と見せ合わせ、クラスメートの思考の多様性を知るとともに、マインドマップ利用の利点を話し合わせた。第3講目では「障害者」に関して学生に何も情報を与えない状態で、各自が持っている「障害者」のイメージをマインドマップに書かせた。出来上がったら、周りの学生と見せ合わせ、気付きを発表させた。第4講目から6講目までは、まず「障害者」に関するドキュメンタリー映像を視聴させた後、マインドマップを用い記録を取らせた。その際「マインドマップに書くことは、ドキュメンタリーの内容に限らず、自分の頭の中に浮かんだことを自由に書く」ように教示した。出来上がったら、周りの学生と見せ合わせ、気付きを発表させた。

4. 結果と考察

最終授業回に「マインドマップの利用について」について、学生にアンケートに答えてもらった。

アンケートでは、「ドキュメンタリー映像を見た後『マインドマップ』で整理したことは、あなたにとって有益だったか。どのような点で具体的に教えてください」と聞いた。その結果、「有益だった」と回答した学生は16名全員であった。具体的にどのように有効だったかについては、下の表2に示したとおり、「文章よりも自由におもしろく書ける」(7名)や「拡散的に考えた」(6名)のように、マインドマップが備えている情報の記録と整理を放射思想的に行うことの利点に言及したものがあつた。またドキュメンタリー映像の視聴によってわかつた「障害者の気持ちやイメージ」(5名)、さらに「自分の気持ちや考え」(5名)を記録する方法としてマインドマップを評価している。

表2 映像視聴のノートテイキングとしてのマインドマップの利用についての学生のコメント

具体的なコメント	同類のコメント(人)
文章で書くより、簡単。おもしろく書ける。自由に書ける。	7
拡散的に考えた。1.2の視点からではなく、いろいろな視点で考えることができた。	6
ドキュメンタリーに出てくる人の気持ちやイメージそのものを整理し記録しやすい	5
イメージを整理するのに、文章よりもマインドマップを使った方が自分の気持ちや考えを自由に伸ばせる	5

それでは、学生は障害者の気持ちやイメージ、さらに自分の気持ちや考えについて、どのようにマインドマップに記録しているのだろうか。次に実際に学生が書いたマインドマップとその学生のアンケートの記述を照らし合わせながら、マインドマップ利用の有効性を見ていく。

学生Aはアンケートでドキュメンタリー映像を記録する方法としてマインドマップについて「文章で記録するより、簡単で面白い点があります。文脈などにとどまらず、自由自在に自分のイメージを整理することができます」と記述している。実際に学生Aが書いたマインドマップを見てみよう。下の図2に学生Aが盲聾者についてのドキュメンタリーを視聴後書いたマインドマップを

示し、表3に図2に書かれた言葉を整理した。中央には、今回のテーマである「障害者」を置き、そこから放射状に伸びる4本のブランチにはそれぞれ「ビデオを見る前のイメージ」「ビデオを見た後のイメージが変わった」「私たちに何ができるのか」「ビデオを見て盲聾者の声が聞こえた」のBIOが付いている。その先のサブ・ブランチを見ると、「できることはけっこうあるんだな～」や「友達、理解してくれる人が欲しい」のように、ドキュメンタリー映像を見て得たイメージや気持ちが多く記され整理されていることがわかる。

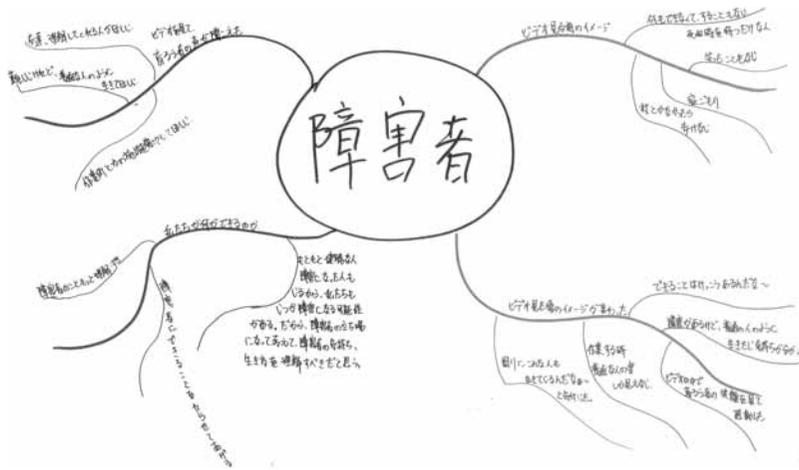


図2 学生A作成のマインドマップ

ドキュメンタリー映像「手と心の通う場所：わくわくわーく作業所を追う」視聴記録
(オリジナルはカラーで作成)

表3 学生A作成のマインドマップに書かれた言葉・イメージ

	セントラル イメージ	BOI	サブブランチ
学生A ビデオ盲ろう者 視聴後	障害者	ビデオを見る前の イメージ	何もできなくてすることもない 死ぬ時を待ただけ 笑ったこともない 家ごもり 杖とかなかったら、歩けない
		ビデオを見た後の イメージが変わった	できることはけっこうあるんだな～ 障害があるけど、普通の人のように行きたい気持ちがわかった ビデオの中で盲聾者の笑顔を見て感動した 作業する時普通の人のように見える 周りにこんな人も生きているんだなあ～と気付いた
		私たちに 何ができるのか	障害者のことをもっと理解する 障害者にできることをやらせてあげる もともと健全な人も障害を持つようになった人もいるから、私たちが いつか障害を持つ可能性がある。だから障害者の立場になって考 えて、障害者の気持ち、生き方を理解すべきだと思う
		ビデオを見て盲聾 者の声が聞こえた	友達、理解してくれる人が欲しい 難しいけど、普通の人のように生きたい 作業所とかの施設を増やしてほしい

ドキュメンタリー映像「手と心の通う場所：わくわくわーく作業所を追う」視聴記録

もう一つ学生Bの事例を挙げる。学生Bはアンケートでドキュメンタリー映像を記録する方法としてマインドマップについて「文章でイメージを整理するより、マインドマップの方がいいと思います。いきいきと描きだすことができ、よく把握できました」と評価している。実際に学生Bが書いたマインドマップを見てみよう。図3に学生Bが盲聾者についてのドキュメンタリーを視聴後書いたマインドマップを示し、表4に図3に書かれた言葉を整理した。中央には、テーマである「障害者」を置き、そこから放射状に伸びる4本のブランチにはそれぞれ「自信」「心理」「ボランティア」「私」のBOIが付いている。その先のサブ・ブランチを見ると、「自信があれば、何でもできる」「一人じゃない、社会人として」のように、ドキュメンタリー映像を見て得たイメージや気持ちが多く記され整理されている。

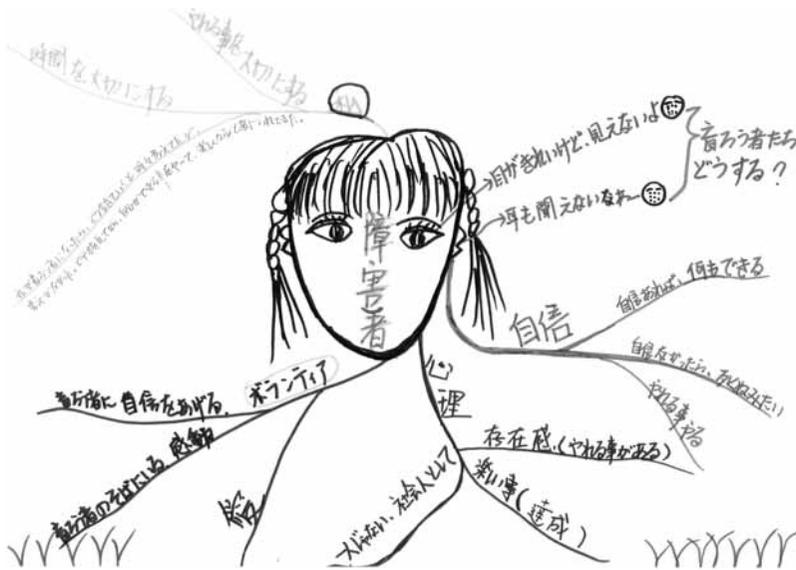


図3 学生B作成のマインドマップ

ドキュメンタリー映像「手と心の通う場所：わくわくわーく作業所を追う」視聴記録
(オリジナルはカラーで作成)

表4 学生B作成のマインドマップに書かれた言葉・イメージ

セントラルイメージ	BOI	サブブランチ
学生B 盲ろう者 視聴後	自信	自信があれば、何でもできる 自信がなかったら、死ぬみたい やれる事やる
	心理	存在感(やれる事がある) 楽しい事(達成) 一人じゃない、社会人として
	ボランティア	愛 盲ろう者のそばにいる、感動 盲ろう者に自信をあげる
	私	やれる事を大切に 時間を大切に 私が盲ろう者になったら、どう生きていかと時々考えてたが、 答えがなかった。ビデオを見てから、自分ができる事をやって、 楽しくなると感じられました
	マップ外にコメント有: 目がきれいだけど、見えないよ。耳も聞こえないなあー。盲ろう者たち どうする？	

ドキュメンタリー映像「手と心の通う場所：わくわくわーく作業所を追う」視聴記録

これらの結果から、映像視聴のノートテイキングの手法としてのマインドマップの利用は、次の2点において利点があると考えられる。まず一つは、マインドマップの持つ「情報の記録と整理を放射思考で行う」機能が有効に働き、学生は文章で書くよりも自由に複数の視点で拡散的に思考しノートを取ることができることである。もう一つは、学生が映像視聴により得たイメージや気持ちを記録するにおいて、文章に言語化して記録するよりも、元来脳内に広がるイメージを表現しようとして考案されたマインドマップを利用した方がより容易であることである。この点については、日本語能力が発達途上である留学生にとって、イメージや気持ちを全て言語化しなくても記録を比較的自由に取れることが評価されたと考えられる。

5. おわりに

本稿では、映像視聴のノートテイキングの手法として学生にマインドマップを利用させ、その効果を報告した。その結果、映像視聴のノートテイキングの手法としてマインドマップの利用の可能性が認められた。

しかし今回の映像の視聴、およびそのノートテイキングとしてのマインドマップの利用は、学部留学生対象の「日本事情」クラスにおいてドキュド라마を制作する準備段階の情報収集としての活動であったので、今後は映像の視聴とマインドマップの利用がどのようにドキュド라마制作活動に有益であったか、またその過程での学びをいかに促進したかを検証したい。

【引用文献】

- 飯島有美子 (2010) 「日本事情クラスにおけるドキュド라마の導入とその効果：社会問題への理解深化とレポート作成のための水路付け」『日本語教育実践研究フォーラム報告』<http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2009forum/round2009/RT-4iijima.pdf> 日本語教育学会
- Joseph Trimmer and Sharon Hamilton (2004) “Docudrama Across the Curriculum.” Professional Development: Where are the Gaps? Where are the Opportunities? National Symposium on Arts Education. Montreal
- トニー・ブサン (2008) 『マインドマップ超入門』デイスカヴァー・トゥエンティワン, p.12

【参考文献】

- 城生伯太郎編著 (2002) 『映像の言語学』おうふう
- バンクス, J.A.(1996) 平沢安政訳『多文化教育』サイマル出版会
- 東海大学文学部 (2009) 『DVD 仲間と生かす個性：車椅子バスケットを通じて』東海大学文学部
- 東海大学文学部 (2008) 『DVD 手と心の通う場所：わくわくわーく作業所を追う』東海大学文学部
- 東海大学文学部 (2008) 『DVD パンから生まれた出会い：障害者自立支援からの学び』東海大学文学部
- 和田一葉 (2010) 「マインドマップを用いたライティング活動の試み：目標言語で考え、構成する力の育成を目指して」『長崎大学留学生センター紀要』18号, pp.81-96
- トニー・ブサン (2005) 神田昌典訳『ザ・マインドマップ：脳の力を強化する思考技術』ダイヤモンド社